# 残りの雪

立原正秋

新潮文庫

# 残りの雪

新潮文庫　　た－15－10

昭和五十五年七月二十五日　発行
平成七年三月十五日　四十刷

著者　立原正秋
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　営業部(〇三)三二六六―五一一一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Mitsuyo Tachihara 1974　Printed in Japan

新潮文庫

# 残りの雪

立原正秋著

新潮社版

2638

# 残りの雪

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

# 山桜

北鎌倉駅をおりて鎌倉街道を小袋谷の方に向って百メートルほど行くと、左側に材木屋がある。里子は克男の手をひいて材木屋の前の道を左に折れた。そこからは谷戸がつづき、道に沿って右側に小さな流れがあり、両側に家々がひっそりと鎮まっている。生家にくるのは四カ月ぶりだった。

谷戸の道は山をこえて梶原にぬけており、この辺一帯の山は春は山桜が霞んだ空を彩り、秋は紅葉が斜面を染めた。紅葉といっても楓類はすくなく、多くは黄櫨だったが、あたたかい湘南地方にしては季節の移ろいかたがたしかだった。

道の両側の桜並木が満開だった。里子はふと足をとめ、午後の空に透けるように溶けこんでいる花をみあげた。思いは春の空にひろがっていかず花の下でとどまっていた。生家の人達にどのように話せばよいのか、里子は花を眺めて途方にくれた。苦しみを抱いてこの谷戸の道を戻るなど、六年前の秋、工藤保之に嫁ぎ生家を出たときには想像もしなかったことだった。

流れには小さな橋がいくつかかかっている。里子は最初の橋を右に折れて渡った。しばらく行くと生家の建仁寺垣がみえてくる。

生家の門の前で数秒足をとめ、朝永弘資と書かれている標札を見あげた。ここは父の家であり

母の家であったが、里子は行き暮れた思いになった。兄の弘一の顔、兄嫁の牧子の顔がよぎっていった。もっと早く善後策を講ずるべきだったかも知れない……。悔んでもはじまることではなかった。ここは生家であったが、しかし戻るべきところではなかった。

いつもなら玄関をあけ、ごめんください、と告げるなり、さっさと式台にあがりこむのに、今日は足が前に出なかった。ここ一週間のうちにおきたことを生家の人に話さねばならない苦痛があった。

間もなく出てきたのは母の明子だった。

「あら、里子じゃないの。なんでそんなところに突ったっているの。早く入りなさい。おかしな子だね」

「ありがとう。みなさん、お変りなくて……」

「こちらは変りませんよ……」

明子は、なにか言葉を継ごうとしてくちをつぐんだ。ここ一週間あまりのうちにやつれてしまった自分の顔を里子は知っていた。顔をつくろって隠せるものではなかった。

居間にはいり、庭に目を移したとき、里子は心がなごんできた。見なれた庭ではあったが、東京のマンション暮しの者に、樹木は彩りがありすぎた。

明子は茶を淹れながら、牧子は手伝いの幸江をつれて買物にでかけた、などと話した。

庭では馬酔木が白い穂をたれ、三つ葉躑躅が開きかけていた。春が闌けて行く目前の光景に眩暈がした。自分だけとり残されているような思いがよぎっていった。

「母さん、二日ほどここにおいてくださるかしら」

里子は庭を眺めたまま言った。
「それはかまいませんが、どうしたの？」
「くたびれてしまったのよ」
言い終ってから里子は虚ろな感情になった。
明子は、なにかあったの、とはきかずに、どうしたの、ときいた。娘を信じて疑ったことがなかった。台所で計量器を使わずに娘を仕込み、その通りに育っていった娘だった。事実この朝永家では、台所においてある計量器は、商人が品物を運んできたとき目方をはかることにしか役にたっていなかった。すべては目分量と勘で料理がつくられていたのである。茶や花にしても、当世風の見てくれのを習わせたわけではない。明子が娘時代に通った禅僧のもとに娘を通わせ、茶と花を身につけさせた。そのように仕込んだ娘がたやすく毀れてしまうとは思えなかった。
勝手口が開く音がし、子供達のにぎやかな声がとびこんできた。克男がかじりかけの煎餅を投げだして声のする方に駈けていった。弘一の二人の子が学校から帰ってきたのだろう。手を洗って、と大人の声がした。牧子がいっしょらしかった。
「おはなしはあとでききましょう。くたびれてしまったのなら、ここで数日もすごせば直るんじゃないの」
明子は勝手口に起っていった。明子は、娘が、くたびれてしまったのよ、と言ったとき、投げやりな調子でないのに安堵した。本当にくたびれた感じが出ていたので、まさか夜夫にかまわれすぎたわけでもあるまいに、などと考えてみたのである。こんなことを考えたのは、夫の弘資の三十代の頃がおもいかえされたからであった。それは、たがいに、いろいろな面で、はげんだ時

代だった。子をうみ、すっかり女になった娘に、明子は、かつての自分を視たのである。

庭を尾長が歩いていた。里子は尾長が繁みのなかに歩いて行くのを目で追いながら、これはやはり現実のことだ、と自分に言いきかせてみた。夫の置手紙を整理箪笥の小抽出にみつけたのは八日前の午前だった。勤めている会社の出張いがいには家をあけたことのない夫が前夜は帰宅しなかった。その朝、里子は独りで目をさましたとき、夫が前夜帰宅しなかったのをあらためておもいかえし、まさか、と思いながら胸さわぎがした。戸坂千枝の派手な顔がよぎっていった。この日は子供の幼稚園入園の手つづきに行かねばならず、里子が置手紙を見つけたのは、幼稚園から帰ってきて、前日の洗濯物にアイロンをかけ、夫のハンカチを小抽出にしまおうとしたときだった。

申しわけないです。私はだめな男です。きみは立派すぎるくらいの妻であり、きみが悪いのではありません。私は本当にだめな男です。離婚届を同封しておきます。きみが印判をおせば離婚は成立します。おねがいします。

三月二十八日

工藤保之

朝永里子様

あのとき置手紙と離婚届を目の前にひろげ、こんな冗談を、と考えたのは何故だったのか……足かけ七年間の二人の生活がこんなに簡単に毀れるわけがない、とどこかで考えていたからだっ

たのか……。そのとき里子はアイロンのスイッチを切ると、もういちど置手紙と離婚届に目を通した。

置手紙には夫の性格がそのまま表現されていた。誠実だが気が弱く、自分の主張を相手の前ではっきり言えない男だった。里子は、これは冗談だろう、とどこかで考えながら、アイロンをかけて折りたたんである夫のブロードのパンツを見おろし、変に虚しい気持になっていった。

田村製作所、というのが夫の勤めている会社だった。いろいろな機械をつくっている会社だった。夫の同僚や上司の顔をおもいうかべた。しかし里子はその人達をよく知らなかった。殆ど、なにかのおりに一度しか会ったことのない人達だった。夫には大学時代から友人がいなかった。家に友人を連れてこなかった。自分だけの城のなかでひっそりと暮し、友人が出来なかった。

里子は会社に電話をかけた。交換台が出てきて、すぐ夫の課の内線につないでくれた。

「工藤は二月いっぱいでやめましたが、どちらさまで……」

たぶん夫の同僚だった男だろう、しかし里子の見知らぬ男の返事をきいたとき、里子のなかで置手紙がにわかに現実性を帯びてきた。

「ちょっとした知りあいの者ですが」

里子はこう答えて電話をきった。それからもういちど置手紙と離婚届に目を通すと、外出の支度をした。

マンションの一階に、短時間子供をあずかってくれるところがあり、里子はそこに克男をあずけると、田村製作所に出かけた。麹町の一角にあるこのマンションは、工藤保之の給料で買えるようなところではなかったが、二年前の秋、里子の父と工藤の仙台の生家から金が出て買っても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

らったものだった。

田村製作所の事務所は新橋駅前のあるビルの八階にあり、里子は受付に名を告げ、夫の上司に面会を申しこんだ。そして間もなく応接室に通され、上司が現れた。

「奥さんが朝永さんのお嬢さんでいらっしゃるのは存じておりましたが、おあいするのははじめてですね」

五十年輩の中肉中背の男で、出された名刺に、杉浦健夫と読めた。

杉浦健夫は、工藤くんが二月いっぱいで会社をやめたのを本当に御存じないんですか、と納得がいかない顔になった。

「私は、工藤くんが朝永さんの会社に移ったものだとばかり思っていましたが」

杉浦健夫は首をかしげた。

里子は多くを語らず、夫が二日前から帰宅しないので伺った、とだけ告げ、田村製作所から出てきた。夫の退職金はすでに支払われていた。ビルの一階におりた里子は、公衆電話で田村製作所をよびだし、夫と同じ課にいる戸坂千枝につないでくれと申しこんだ。戸坂千枝は二月いっぱいでやめた、と予期した返事がかえってきた。前年の春、夫の課の者達がそろって旅行をしたときの写真があり、丹前を着た夫のかたわらにやはり丹前姿の派手な顔の女がすわっていた。それが戸坂千枝だった。ときどき夜中に電話がかかってきたが、夫は会社の用件だと言っていた。里子が、おかしい、と感じたのは前年の夏だった。週に二回は夫の帰りが夜中の一時をすぎるようになった頃だった。

田村製作所から戻った里子は、夫の仙台の生家に電話をした。工藤の生家は精好仙台平の織元

で、工藤は次男だった。

電話に出てきたのは夫の母だった。保之はこちらに来ていないが、なにかあったのか、と夫の母は言った。会社をやめてしまい帰宅しないもので、と里子ははっきり告げた。置手紙のことは話さなかった。会社をやめてしまったのはおかしい、と夫の母は言った。もうすこし様子をみてから仙台に伺うかもしれない、と告げて里子は電話をきった。

あくる日、里子は再び田村製作所に電話をし、やめた戸坂千枝のアパートの場所をききだした。アパートは高円寺にあり、里子がそこを訪ねたのは正午すこし前だった。管理人の小母さんは六十がらみの人で、戸坂千枝は五日前に移転していた。

「なんでも、結婚するので、もっと広い家に越すんだ、とはもらしていましたが、あなたは戸坂さんの御親類のかたで……」

小母さんは、地味な紬を着た里子をものめずらしげに眺めた。

「いえ、むかし、同じ会社につとめていたものです」

里子はこれ以上きいても無駄だとわかり、アパートを出てきた。夫が戸坂千枝といっしょに行動していることはまちがいないことに思えた。管理人の小母さんは戸坂千枝の移転先を知っていなかった。

それから今日まで、とりとめのない日が流れていった。夫をさがすにしても見当がつかなかったし、それよりも里子は、男に見捨てられた女を振りかえっていたのである。もし、子は鎹、という言葉が現代でも通用するとすれば、夫はいずれは戻ってくるだろう……。しかし一流会社をやめてまで姿をかくした男が、そう簡単に元に戻るとは思えなかった。友人はいなかったが、し

かし家庭ではきちんとした夫だった。なぜ友人をつくらないのか、と里子はいちど夫にきいたことがあった。そのとき夫は答にならない答えかたをした。里子は、夫の性格だと思うしかなかった。

マンションの前は車道で、車道の向うがわもマンションだった。窓から眺める風景全体がなにか硬く、焦点がなかった。いちばんはっきりしているのは、夜になると向うがわのマンションにあかりがつくことだった。窓という窓があかるくなり、しかしそこに生活の匂はせず、つめたい都会の感覚だけがあった。

とりとめもなく夢とうつつのあいだを往還しながら一週間をすごし、相談すべきところは鎌倉の生家しかないのだ、とまるではじめて判ったように気を取り直し、鎌倉にきたのであった。

しかし、こうして生家の畳にすわり庭を眺めているうちに、相談してどうなるというものでもないように思えてきた。日が経つにつれ、夫が家出したことが現実性を帯びてきていたのである。繁みに入っていった尾長が出てくると、芽をふいたばかりの槐の木の枝にとびあがり灰色のながい尾を数度動かし、それから山の方に飛んで去った。

里子が生家の人達に夫のことを話したのは、父と兄が帰宅して夕食をすまし、子供達が床についた後だった。夫に去られた妻の恥ずかしさを里子はこのとき感じた。兄夫婦を目前にして、夫に去られた妻の立場がはっきり見えてきたのである。しかし里子は置手紙と離婚届をとりだしてみせた。

「あのおとなしい工藤くんがねえ、信じられないことだ。原因はなんだね」

兄の弘一は怒っていた。

「わかりません」
里子はすこしためらってから戸坂千枝のことを話した。戸坂千枝のアパートを訪ねたことも話した。
「ひどいことをするじゃないか。エンジニアにはとかく視野のせまい人が多いが、これはひどいよ。一流大学を出た男のすることかね」
弘一は語気を荒げた。
「おまえが怒っても仕方がない」
父の弘資は置手紙と離婚届に目を通してから煙(たばこ)をつけた。
「興信所にたのんで、その戸坂千枝の移転先を調べてもらったらどうでしょう」
と明子が言った。
「そんなことをしても無駄だ。その女のところにいる工藤くんを連れ戻してきてどうするというのかね。そんなことではない。……里子を工藤くんのところにやるとき、私にはちょっとした危惧があった。工藤くんのお母さんは、いわば教育ママなんだな。大事に息子を育ててきた。一流大学を出て一流会社に就職した。温室育ちの息子だったのだ。こうした人間はいったん毀れたら使いものにならないコンベヤーと同じだ。世間には、毀れたコンベヤーをまわして体面をつくろっている人達もいる。里子もそうだが、おきてしまったことを冷静にみつめる、それしか方法がない。里子にはつらい春だろうが」
弘資は残りの茶をのむと、なにげない動作で居間からひきあげていった。
父が居間から去ってから、母と兄と兄嫁はそれぞれ勝手なことを話しあっていたが、里子は夫

とすごしてきたこれまでの歳月をふりかえってみた。夫とは恋愛結婚だった。東京の女子大を出て、二年だけという父の許可を得て父の会社に勤めた。朝永商店は、田村製作所から機械を仕入れており、それを東南アジアに輸出していた。里子が工藤と知りあったのは、里子が仕入課につとめていた関係からだった。

そんな過去のことはどうでもよかった。男と女がいっしょになり、子をうみ、ともに日を送るのは、自分と他人を統一する意識がなければ出来ないことだった。工藤から結婚したいと申しこまれたとき、里子は工藤という他人のなかに自分という女を贏ち得たと思った。自分が工藤に認められ、同じように工藤が里子のなかで彼自身を得たはずだった。やさしい男だった。ものを食べることひとつをとってみても、よく味をかみしめる男だった。やさしすぎて男らしさを感じさせない点もあったが、しかし里子に不満はなかった。そんな男がなぜ蒸発してしまったのか、わたしになんの不満があったのか……。蒸発という言葉はいやだったが、それしか表現のしようがなかった。

母と兄と兄嫁がしゃべり疲れてそれぞれの部屋にひきあげたのは十一時をすぎていた。里子は家族の話を全部きいていたわけではない。血がつながっている者としての慰めの言葉もあったが、結局は里子にしてみればなんの役にもたたなかった。

里子もしばらくして床についたが、かたわらで寝ている子供の顔を眺め、これからが問題だ、と思えてきた。父親は出張していると言ってあったが、いつまでも出張というわけにはいかないだろう、なんと答えるべきか……子供がかわいそうだ、といった思いにはまだたちいたっていなかった。夫に去られた女があわれだ、といった思いもまだ湧いてこなかった。あわれさより先に

捨てられた女の恥ずかしさの方が心をしめていた。

ここ一週間の心の疲れが出てきたのだろう、あくる朝里子が目をさましたら十時をすぎており、かたわらの子供はもう見えなかった。雨戸のがらりの部分の障子があかるかった。居間に出て行ったら、兄はすでに会社に出かけ、父と母が茶をのんでいた。

「すみません、寝すごしてしまって」

「疲れたんだね。克男はいま牧子がつかいに行くのにつれて行ったわ。すぐ食事にしますか？」

「自分でやりますわ」

里子は母を制し、食堂に行った。

食事をすませ、顔をあらって居間に戻ったら、山桜をみに行く元気があるかね、と弘資が新聞から目をはなしてきいた。

「会社にはお出かけになりませんの？」

「今日はやすむことにした」

「それならおともしますわ。ちょっとお待ちになってね」

里子は部屋に行き、蒲団をあげ、それから母から借りた半幅帯を解き自分の帯をつけた。

あたたかいので羽織は着ずに家を出た。明子は、わたしは用がありますから、といって家にのこっていた。

谷戸の両側の山の斜面に山桜が点在していたが、数は多くなかった。

「天園から獅子舞の辺に行ったことがあるかね」

弘資がきいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton